

「まあ」の出現しやすい条件

— 教師と学生との会話を中心に —

馮 文 彦
(2019年10月3日受理)

Conditions that “Maa” is likely to Appear
— Focusing on conversations between teachers and students —

Wenyan Feng

Abstract: This study uses the recordings of Japanese native speakers' natural conversations as the research data to investigate the usage of Japanese filler “Maa”. Comparing the conversations between students and their friends with those between students and teachers, the results indicated that 1. teachers use “Maa” more often than students, and when students talk to their teachers, they are not consciously avoiding “Maa” 2. in student-friend conversation “Maa” is prone to appear when speaking with confidence, in student-teacher conversation, people use “Maa” to make others feel him humble. Analyzing the student-teacher conversation, the result shows that “Maa” tends to appear in utterance with meta-consciousness. Specifically, it is an utterance that tries to show him humbly, or a comment from a meta-perspective, and it often appears in the form of supplementary utterance. Also, the meaning of “Maa” cannot be sought, it should be considered in the form of specifying an environment in which it appears easily.

Key words: Maa, Natural Conversations, Meta-perspective

キーワード：まあ、自然会話、メタ的な視点

1. はじめに

日本語には数多くのフィラーが存在している。「まあ」はそのうちの一つである。山根（2002）は講演、留守番電話、対話、電話という4種類の談話を分析し、談話に出現するすべてのフィラーの出現数を集計した結果、「まあ」の出現数はどの談話においても上位4つに入ることが明らかになった。「まあ」は日常生活で最も頻繁に使われるフィラーの一つと言えるだろう。

「まあ」についての代表的な研究として、川上（1993、

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：柳澤浩哉（主任指導教員）、白川博之、
仁科陽江、永田良太

1994）、富樫（2002）、川田（2007）、小出（2007）、大工原（2010）、山田（2013）などが挙げられる。

しかし、多くの研究は作例から「まあ」の意味機能を導き出しており、長時間にわたる自然会話の用例を丹念に調査した上で結論を導き出した研究は見られない。コーパスやインタビュー等の用例を使った研究もあるが、ごく少数の用例をもとに分析を進めている点で、作例と同様の問題を内包している。

本稿は長時間にわたる日本語母語話者の自然会話を文字起こしし、そこに現れた「まあ」の意味機能を考えていく。ただし、いきなり意味機能を考えるのではなく、「まあ」の出現しやすい環境をいろいろな角度から捉え、それらに共通する性質を絞り込むことで「まあ」の意味機能に近づくという方法を取る。これまでの先行研究は、「まあ」が特定の意味を持つことを前提としているが、この前提についても検証の必要があ

ると考え、このような方法を選んだ。

本稿で使用するデータは学生と友人及び学生と教師の自然会話である。この2種類の会話において、後述するように、「まあ」の出現規則が異なるため、本稿では教師と学生の会話で出現する「まあ」を主な分析対象とした。

2. 先行研究と残された課題

最初期に「まあ」の意味規定を試みた森山(1989)では、「まあ」の意味は「色々な問題にこだわらないという発話的意味が基本」と述べている。これを踏まえ、川上(1993, 1994)は「まあ」の基本的意味は『『いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べる』という『概言』という姿勢・態度に関わる』(川上1993:72)と述べている。また、「まあ」は出現位置と機能によって、発話の冒頭に位置し、相手の発話に反応する「応答型用法」と発話中の文頭及び文中に位置し、自分の主張・見解を展開させる「展開型用法」の2種類に分けられると川上は指摘している。次の(1)は応答型用法で、(2)は展開型用法の例である。

- (1) A: だって、俺、おまえ、金パーヤで。
B: まあ、そや、えらい損やわけな。
(川上1993:70)

- (2) リンゴ: どんな内容ですか?
林アナ: エー、まあ、主婦のみなさんのパートナーなんですが、労働省の調査によりますとですねえ、共働の世帯とそうでない世帯を上回ったんですねえ。
(川上1994:72)

富樫(2002)は話し手の心内における情報処理の観点から、「まあ」の考察を行っている。その結果、「まあ」の本質的機能は「ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す、あるいは計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す」(富樫2002:24)と富樫は主張する。

- (3) A: 結局どうなったんですか?
B: まあ、いろいろありまして。
(富樫2002:16)

(3)の「まあ」は、「いろいろありまして」という結論に至るまでの計算過程に曖昧さを含むことを表す標識となる。

大工原(2010)は「まあ」の用法を大きく「但し書き的用法」と「強調的用法」に分けている。但し書き的用法の音調は高低となって、話し手の内心のわだかまりを示すに対して、強調的用法の音調は低高で延伸

を伴い、わだかまりにこだわらないことを示す。¹

- (4) 今年の巨人は強いよ。まあ、投手陣に若干な不安はありますけど。

(大工原2010:139)

- (5) 宮島のあなごはまあーおいしかったですよ。

(大工原2010:155)

(4)の「まあ」は但し書き的用法で、「今年の巨人は強いけど、投手陣に不安がある」というわだかまりを明示的に示している。(5)は強調的用法で、わだかまりとは違い、「ともかくおいしかった」ということを強調している。

山田(2013)は話し手の情報処理の視点から、「まあ」が発されるまでの心的プロセスを考察した。結果として、談話標識の「まあ」は大きく話題を更に広げていく「展開タイプ」とまとめに入る・暫定的判断を示す「概括タイプ」の二つに分けることができる。「まあ」の心的プロセスは「話し手が当該の情報を検索して、複数の候補が心的パッファに上がり、そのどれかを選出したときに、『マア』を伴って発話させる」(山田2013:311)と述べている。

- (6) A1: 海猿ってだいたい撮影に入ってどれぐらいかかってるのこれ。

B1: エーっとー、4ヶ月5ヶ月ぐらいですかねー。はい。

A1: はあー。かか、じゃあずっと。

B1: そうですねーアノーまあ夏の暑い時から、最後はあの一2月、あたままで撮影して一。

(山田2013:308)

(6)は、話し手が心内で表現を検索している時、「夏の暑い時から」、「7月から」などの候補があり、その中から「夏の暑い時から」を選んだ時、「まあ」が出現する。

以上の先行研究をまとめると、「まあ」の意味は次の二つと関わっている。²

- i 処理過程が曖昧であることを示す。
- ii 話し手の内心にわだかまりがあることを示す。

既に述べたように、これらの先行研究の残された課題として、次の二つがあげられる。一つは、作例を主な分析対象としていること。もう一つは、「まあ」が特定の意味を持つという前提で分析を行っていることである。後者が問題となる理由は次節で述べる。

3. 研究目的と方法

本稿が自然会話の「まあ」を分析対象とすることは、

既に述べた通りである。本研究では自然会話から250例の「まあ」を収集したが、その多くが意味を特定しにくい、あるいは特定できない「まあ」であった。先行研究は意味を明確に特定できる「まあ」を対象に分析を進めているが、自然会話の「まあ」で意味を特定できるものは、あいづちの「まあ」を除くと、ごく少数である。

この事実を踏まえて、本稿では「まあ」の出現しやすい環境をいろいろな角度から取り出し、そこに共通する性質を絞り込むことで「まあ」の意味機能に近づくという方法を取る。

なお、会話データは、後述するように、学生と学生(友人同士)、学生と教師(初対面)の大きく二つのグループから収集しているため、まず、二つのグループをひとまとめにして分析できるかを判断する。両者の「まあ」に違いがなければ、一つにまとめられるが、無視できない差異があると判断されれば、別々に分析することになる。その判断は「まあ」の出現傾向の比較で行うが、現れる数だけでなく、文脈や発話姿勢まで含めた総合的な視点から行う。

その上で、「まあ」の出現しやすい環境ごとに用例を検討し、それらの共通性を考え、「まあ」の現れやすい条件あるいは「まあ」の意味機能を探る。

本節の最初に述べた通り、自然会話に現れる「まあ」の大部分は意味の特定が困難である。それらの「まあ」の意味あるいは機能をどう規定すべきかの検討が本研究の最終目的になるだろう。

4. 分析データ

本稿では、9名の学生が親しい友人と初対面の教師と行った会話を分析対象とする。学生9名の内、男性は5名、女性は4名、全員20代である。友人9名は同じく全員20代で、男性5名、女性4名であり、教師9名は40代から60代前半で、男性4名、女性5名である。会話参加者は全て日本語母語話者であり、会話内容は自由とした。1件約15分、合計18件、約270分の自然会話であり、これを録音し、文字化した。

5. 「まあ」の使用数

5.1 「まあ」の使用数

まずはデータ中での「まあ」の使用について、学生、教師、友人それぞれが使用した「まあ」を集計し、表1と表2にまとめた。なお、「学生」の場合、会話番号が同じ会話は、同一人物による会話であることを表す。

表1 「まあ」の使用数(学生と教師との会話)

	学生	教師
会話1	4	17
会話2	1	7
会話3	8	5
会話4	1	4
会話5	3	14
会話6	2	37
会話7	6	48
会話8	6	3
会話9	3	19

表2 「まあ」の使用数(学生と友人との会話)

	学生	友人
会話1	0	2
会話2	0	2
会話3	4	6
会話4	1	3
会話5	1	0
会話6	9	5
会話7	6	6
会話8	4	3
会話9	6	4

表1と表2から、同じ学生が友人及び教師との会話で使用した「まあ」の数を比較すると、以下のような結果となる。

教師との会話の方が「まあ」が多い: 5名(9名中)
友人との会話の方が「まあ」が多い: 2名(9名中)
2つの会話の「まあ」の数が同じ: 2名(9名中)

「まあ、わかりました」や「まあ、頑張れ」のように、「まあ」は時々尊大な印象を与えるが、この結果から、学生は教師に対して話す際にも、「まあ」を避けていないことが分かる。

5.2 「まあ」の出現傾向

ここでは「まあ」の現れやすい環境を抽出した後、二つのグループについて各環境での現れ方を調べる。現れやすい環境を次の観点から探った。

- I 「まあ」と共起しやすいもの
 - 文法形式、語彙、音声(笑い声など)
- II 会話の中で「まあ」の現れやすい場所
 - 発話姿勢など
- III あいづちなど

筆者らは大学講義を対象に、六つの環境（逆接、順接、譲歩、思う、体験、あいづち）を選び、それらが「まあ」と共起する頻度を調査している（柳澤・馮（2019））。本稿では、この時の六つの環境を上観点から修正し、最終的には下の項目を設定した。³（環境を選定する条件に客観的に区別できることを加えている。）

逆接形式、挿入、「思う」、体験、あいづち、笑い

新たに「笑い」を加えたのは、学生同士の会話において、笑い声の前後に出現する「まあ」が多いためである。笑い声は、話者の気持ちを顕著に示すため、「まあ」の出現環境を知る手掛かりになると考えた。

各用例の内訳を整理して、下の表3と表4にまとめた。

表3 学生と教師との会話で出現した「まあ」の出現数

逆接形式	73 (38.8%)
順接	19 (10.1%)
挿入	52 (27.7%)
思う	13 (7.0%)
体験	35 (18.6%)
あいづち	5 (2.7%)
笑い	34 (18.1%)
出現数合計	188 (174.5%)

表4 学生と友人との会話で出現した「まあ」の出現数

逆接形式	20 (32.3%)
順接	4 (6.5%)
挿入	8 (13.0%)
思う	4 (6.5%)
体験	10 (16.1%)
あいづち	10 (16.1%)
笑い	23 (37.1%)
出現数合計	62 (151.6%)

各用例は排他的な関係ではないため、合計の割合は100%を超えている。

この二つの表の各項目を比較すると、以下の結果となる。

- ①逆接形式：どちらの会話においても30%以上を占めている。
- ②順接：「学生・教師」の方が割合が高い。
- ③挿入：「学生・教師」の割合は「学生・友人」の倍になる。
- ④思う：二つの会話の差が小さい。

- ⑤体験：二つの会話の差が小さい。
- ⑥あいづち：「学生・友人」の割合は「学生・教師」の約6倍になる。
- ⑦笑い：「学生・友人」の割合は「学生・教師」の倍になる。
- ⑧全体の出現数：「学生・教師」の出現数は「学生・友人」の約3倍になる。

5.3 「学生・友人」と「学生・教師」の「まあ」の比較

各項目の割合を見ると、順接・挿入・あいづち・笑いの項目には倍近い差があるが、あまり差のない項目も多いため、表に現れた数値だけでは、両者に差異があるか否かは判断できない。両者をひとまとめにできるかを判断するには、個々の用例を比較する必要がある。結果を先取りすると、発話姿勢において両者の間に異なる傾向が見られた。

「学生・友人」との会話の「まあ」に典型的なのは、自信のある発言に「まあ」が多く現れることである。このような発言は笑いと共に起ることが多く、笑いとの共起において両者の割合に違いのあるのは、これが主な原因である。⁴

- (7) JS7 でもさ、△△の将来やりたいことって、ウエディングプランナーでしょ。
- JF7 うん。
- JS7 プライダル？
- JF7 プライダル。
- JS7 コンサルタントっていうの？
- JF7 プライダル、コーディネー[トとか]。
- JS7 [あコー]ディネーター。
- JF7 プライダルプロデューサーとか、うん。
- JS7 あーあ、で、アジアのほうに展開したいんだっけ。ゆくゆくは。
- JF7 まあゆくゆくは世界だけだね。
- JS7 (hh)
- JF7 まあとりあえずアジアは制覇したい。
- JS7 でかいね。でかいね。そっかそっか。

(8) では、成績の悪い友人の進学について話している。

- (8) JS3 成績、えでも一般受験でも学校の、[成績証明]とか出る[でしょう。]
- JF3 [あ、いるいる。] [出る、出る。]
- JS3 いまいちなんじゃないかなあ (hh)。
- JF3 あ、そう。
- JS3 うん。
- JF3 まあなんとかいくもんだよね。あのうほら推薦書ってこういろんな書き方が (hh)

あるじゃん。

JS3 (hh) プラスの面をね、押して押して。

(7) と (8) の例は学生と友人との会話で、「まあ」の典型的な例である。(7) では、JF7はウエディングプランナーの事業をゆくゆくは世界に展開したいという尊大と感じさせる発話をする時に「まあ」を使っている。(8) では、成績の悪い友人について上から目線で勝手な推測をしている会話で、「まあ」の前後に現れる二人の笑いは、優越感を背景とした笑いと考えられる。

「学生・友人」の「まあ」は、このような自信のある発言に多く現れている。

これに対し、「学生・教師」の会話では、謙遜を感じさせる発言に「まあ」が多く存在している。(9)と(10)は「学生・教師」の会話での「まあ」の典型的な現れ方である。(逆接形式に下線)

(9) JS6 そういふの中国語学科とかあるんですか。

JT6 やってます、やってます。

JS6 何人でやってるんですか。

JT6 3人ですね。

JS6 3人に対して1人の先生ですか。それはネイティブの先生がついて[るんですか]

JT6 [もちろんで]すね。

JS6 へえー。

JT6 まあそれは非常にいいと思いますけども、まあ、でもそれ1年間だけですから。

JS6 そうですね。

(10) JT5 でもまあ、あの一、99パーセントだめだけど、

JS5 はい。

JT5 まあ0じゃないから、

JS5 はい。

JT5 とりあえずやってみようと思って、

JS5 うんうんうんうん。

JT5 で、自分なりに勉強して、

JS5 はい。

JT5 受けたら、

JS5 はい。

JT5 受かっちゃったの。

JS5 えー (hh)。

(9) のJT6は、相手から褒められたことを受けての発言で、相手の賞賛を否定しようとする謙遜の意図がある。まず、「まあそれは非常にいいと思いますけども」で相手の賞賛をいったん認めるが、「まあ、でもそれ1年間だけですから。」と続けることで、賞賛された制度が限定的なものというマイナス面を主張している。この謙遜の発言の中に「まあ」が二回現れている。

(10) において、JT5が昔大学院の入試を受けた時、一か月しか勉強しなかったのに、大学院に合格したことについて話をしている。ここでの「まあ」は(9)と同じく謙遜の意図があり、できるだけ話を自慢話に聞こえないように発話している。

以上に示した例のように、「学生・友人」と「学生・教師」の「まあ」は、自信と謙遜という形で発話姿勢に明らかな傾向の違いがあり、一つにまとめて処理することは避けるべきと判断した。

本稿においては、教師と学生の会話に現れた「まあ」を分析対象とする。(必要に応じて、「学生・友人」の「まあ」も参照したい。)

次節以降は、用例数の多い逆接形式、挿入、「思う」、体験(自分語り)、そして表には入れていないが、用例数の多かった「言い換え」の用例を検討したい。「言い換え」は逆接や挿入などのように、特定の語彙の有無で判断できないため、調査項目に加えなかったが、「言い換え」と共起する「まあ」が多く見られたため、その典型例を検討したい。

5.4 逆接形式と共起する「まあ」

「学生・教師」の会話では、出現した「まあ」の38.8%が逆接形式と共起しており、逆接形式は「まあ」の意味機能を考える上で、重要な形式であると考えられるが、「まあ」に関する先行研究で逆接との関係に注目したものは管見の限り少ない。本稿の逆接形式は、逆接の接続詞・接続助詞・接続形などをまとめた項目である。逆接形式は二つの内容を併置する形式であるが、その関係には、二つの内容が対立する典型的な逆接から、譲歩、補足、前置き(「昨日、東京に行ったんだけど、天気が悪くてさあ。」等)までいろいろな段階がある。

(11) は、二つの内容を対比させる逆接である。(11) は、2人は中国語の学習について話している。

(11) JT6 まあ中国人と同じようにしゃべれるっていうふうになるまでそんな簡単にはなりませんけれども。

JS6 うん、うんー。

JT6 でもまあ基礎的なことを身につけてればそれはいかせるとおもいますよ。

JS6 なるほど。

(11) には二つの「まあ」が見られる。はじめの「まあ」は、譲歩を示す「けれども」と共起して、二目の「まあ」の直前にある「でも」は逆接を表すと考えられる。

(12) JS8 中国と韓国だけなんですか。

JT8 はい。

JS8 なんかあの英語圏、まあアメリカとかそうなんですけど、あのへんはやっぱり、

ないことに気づき、次の発話で「あのまあ、日本語と日本語教育」に言い換えている。

(18) も同じく、JT1が「ブログ」と言う際、発音（「ブログ」のアクセント）が若者の発音と違うことに気づき、「まあ若い人の発音ならブログっていうのか」とアクセントを言い直しているが、この発音の違いは発話者の中心的主張と繋がっていない。

「まあ」と共起する言い換えの用例を検討すると、(17) (18) のように自分の発言が完全に正しくないと発話者が自覚する時、「まあ」が出現しやすいことが分かる。

5.7 「体験」・「思う」の「まあ」

本節では、同じく出現数の多い「体験」と「思う」の「まあ」について見てみたい。これは自分の体験あるいは自分の考え（思う）について語るもので、本稿では、このような「まあ」を「自分語りの『まあ』」と呼ぶ。「学生・友人」の自分語りでも「まあ」は現れやすいが、それらは尊大な印象を与えることが多い。これに対して、「学生・教師」ではほとんどが謙遜を感じさせる。

(19) JT7 あのう、(hh) 正直な、あまりあの関係ないかもしれないですけど、僕のその家族の、

JS7 ええええー。

JT7 一部の者が、

JS7 はい。

JT7 あのー中国系なんですよ。

JS7 あーそうなんで[すか。]

JT7 [ええ。]あのう今は、マレーシアとシンガポールに、

JS7 はいはいはいはいはいはい。

JT7 の、中国系として、

JS7 はいはいはいはい。

JT7 いるんですけど。まあ単なる、遠い。遠い親戚というだけですけど。

JS7 (hh) あ、はい。

(20) JT7 (hh) 外国語勉強するには (hh)、まあ一友達っていうか、お友達を作るのが一番。

JS7 (hh) それがいいからみたいなかんじで。そこまで世話してくれるんだ。

JT7 たしかに。

JS7 何も頼んでないのに、そんなことまでしてくれるんだって。

JT7 そうですよ。

JS7 まあ△△一部だと思んですけど。その一部にも触れられただけでも、私にとっては、幸福なことなのかなって思いまし

たね。

JT7 うーんー。

(19) は「体験」の例で、JT7は自分の海外の親戚の話をしている。自慢話に聞こえないように、「単なる、遠い。遠い親戚」という情報を提示するとき、「まあ」を使っている。

(20) は「思う」と共起する例である。JS7は中国で会った親切な中国人の話をしている。自分が言っているのは中国人全体ではなく、その中の一部であることを相手に誤解しないように配慮しながら、「まあ」を発している。

6. 考察と結論

「まあ」と共起しやすい環境における例文を検討してきた。検討した環境は、自分語り（「思う」と共起する発言、および自分の体験を再現する発話）を除くと、譲歩・前置き・挿入・言い換えなどである。これらの構文にはいずれも、主節を補足する形式という共通した特徴があるので、「まあ」は中心的でない位置づけられた見解、すなわち補足的な発言と共起しやすいことになる。ただし、本稿では補足的な発言という表面的なレベルではなく、補足的発言の背景にあるメタ的な視点に注目したい。補足的な発言は、自分の発言をメタ的な視点で見ることを前提に生まれるものであるが、「まあ」が導く節は、単にメタ的な視点で見るだけでなく、前後の発言の印象を操作しようとする意図を感じさせるものが多いからである。

「まあ」によって導かれる補足内容に注目すると、多くの用例に一定の方向性を見出すことができる。それは、相手に対する配慮であり、具体的には自慢・尊大といった印象を軽減する意図である。例えば、「まあ、でもそれ一年だけですから。」(9) は、相手の賞賛を否定する節であり、「まあ失礼ですけど完璧なんですかね」(15) は、批判的発言に先立って発言のマイナス印象を緩和しようとする発言である。次の二つの例文は自分語りの中にあり、さらに逆接形式と共起している「まあ」で、いずれも謙遜の意図を読み取れる。「まあ、単なる、遠い、遠い親戚というだけですけど。」(19) は、自分に外国人の親戚がいる事実が自慢に聞こえてしまわないよう配慮した発言であり、「まあ中国限定なんですけど」(20) は自分の体験を小さく見せて謙遜しようとする発言である。あるいは、謙遜とは微妙に異なる次のような配慮もある。「プロ、まあ若い人の発音ならブログっていうのか」(18) は、「ブログ」に対する自分の特殊なアクセントが、違和感を与えることに配慮した発言と考えられる。いずれも、自分の

発言をメタ的なレベルから見ただけでなく、発言の印象を変えようとする異なるレベルの意識を持っている(メタ的なレベルから意味を付加する)。

ただし、「まあ」には謙遜とは無縁の次のような例文もある。「でもまあ、基本的なことを身につけていればそれは活かせるとおもいますよ。」(11) これは、それまでの会話の流れを振り返り、全体を総括する(あるいはフォローする)意図を持った発言である。相手への配慮はあるが、謙遜とは異質の配慮である。次の例文も同様である。

(21) JT1 でもまとめる役は大変だから、怒られても困っちゃうよね (hh)。

JS1 そうなんです。[でも]もう、謝るしか[なくて] (hh)。

JT1 [うん。]

JT1 [うん。]まそれが、まあ上でまとめる人のつらさだよ (hh)。

(21) は JS1 が研究会の実行委員を担当することについて話している。(実行委員会の)まとめる役は大変であることをいろいろ話して、最後 JT1 は「まそれが、まあ上でまとめる人のつらさだよ」と述べ、これはメタ的な視点から新たな見解を加える発言ということになる。謙遜ではないが、会話の流れを振り返り、メタ的視点から補足や部分修正を加える意図を読み取ることができる。なお、ここにあげた (11) (21) の「まあ」が補足的な節でなく、主節に現れていることに注意したい。謙遜の意図と共起する「まあ」が、補足的な節に限定される傾向を予想させるからである。

ここまでの考察をまとめる。「まあ」は補足的な発言に現れることが多く、その多くは発言に謙遜の意味を付加する発言である。一方、主節に現れる場合、謙遜の意味を付加しないことがあるが、いずれの場合にも、メタ的な意識を持った発言と共起している。次を本稿の結論としたい。

「まあ」は、メタ的な意識を持った発言に現れやすい。その内容は、自分の発言を謙遜に見せようとする補足的なもの、あるいはメタ的な視点からのコメントであり、形式的には補足的発言に多く現れる。

「まあ」においてメタ的な視点が重要と判断した背景として、「まあ」にメタ言語の用法があることを指摘したい。

(22) まあ、冗談だけ。

これは単独で出てきても、それまでの発言が冗談であったことを教えるメタ言語的発言であると分かる。他のフィルターでこの用法を代用することは困難であり、「まあ」がメタ的な視点に現れやすいことを示す有力な根拠になると考えられる。

本稿の最初に次のことを述べた。先行研究は「まあ」が明確な意味を持つことを前提に進められてきたが、自然会話に現れる「まあ」の大半は意味の特定が困難である。実際、本稿に引用した例文内の「まあ」についても意味を明確に特定できるものはほとんどなかった。

上に示した「まあ」についての結論は、次の認識を前提としている。「まあ」の個々の用例に明確な意味を定めることはできず、「まあ」の意味は現れやすい環境を限定していく形で特定されるべきである。ただし、これは「まあ」に特定の機能がないことを主張するものではない。「まあ」は他のフィルターで代用できない特定の機能を持つが、それが明確な意味と結びつくものではない。

7. 今後の課題

本研究の最終課題は「まあ」の意味機能を明らかにすることである。今回は、「まあ」の現れやすい条件を明らかにしたもの、「まあ」の機能を特定するにはいたっていない。より広範の「まあ」を調査することで、最終課題である「まあ」の機能の特定を目指したい。

今回は「学生・教師」の会話だけを分析したが、今回は「学生・友人」の会話进行分析する予定である。

また、「まあ」と曖昧性・わだかまりとの関係、尊大との関係は今後の課題とするが、本稿での結論である発言をメタ的な視点から客観的に見ていることと連続的であると考えている。

なお、「まあ」の発音は長さから、「まあ」と「ま」に分けられ、アクセント型からは下降調と上昇調に分けられる。このような異なる発音によって、「まあ」の意味が変化するかどうかは、これから考察していきたい。

【注】

- 1) 大工原 (2010) の表記を踏襲し、高低の音調で発音されるものは「まあ」で表記し、低高の音調で延伸を伴って発音されるものは「まあー」で表記する。
- 2) 山田が提唱する「複数の候補」は富樫が主張する曖昧性の出現過程を解釈するもので、富樫とは同じ立場であると考えられる。しかし、山田の「複数の候補」は言語編集レベルのもので、大工原が主張する「わだかまり」(他の事実が存在する)とは異なるものである。
- 3) 各用法の認定基準は以下の通りである。

逆接形式：「まあ」の前または「まあ」の後に逆接の接続詞・接続助詞が出現する例。(本稿では、逆接の接続詞・接続助詞を逆接語としてまとめた。また、一続きと認められれば、逆接語と「まあ」の間が離れている例も含めた。)

順接：「まあ」の前または「まあ」の後に順接の接続詞・接続助詞が出現する例。

挿入：挿入の認定基準は、丸山他(2004)を踏襲し、以下の3つとした。(丸山他は挿入節の末尾の形式を限定しているが、より多様な形態を検討するため、本稿において挿入節の末尾の形式を限定しない)

- ① その前後に係り受け関係を持つ要素があること。
- ② その末端で発話を区切ると、その前後の要素間の文法的・意味的な整合性が保たないこと。
- ③ 元の発話に対する「前置き」や「断り書き」になっており、その部分を除いても影響がないこと。

思う：「まあ」の後に「思う」が出現する例。(一続きと認められれば、「まあ」と「思う」との間が離れている例も含めた。)

体験：自分の体験を再現する中に出現する「まあ」。体験に対する感想や意見、他者の体験の再現等は除外する。

あいづち：あいづちと認められる「まあ」。

笑い：「まあ」の前後に笑いがある例。

4) 本稿の記号は『会話分析入門』(申田秀也 2017)に基づき、若干な変更を加えたものである。記号の意味は以下の通りである。

△△：個人情報などに関わる内容。

[]：この記号をつけた複数行の発話が重なり始めた位置。

]]：この記号をつけた複数行の発話の重なりが解消された位置。

。：尻下がりの抑揚。

?：尻上がりの抑揚。

(数字)：沈黙の秒数。

(hh)：笑い。

5) 逆接は主節と従属節の対立が強い。それに対し、補足と前置きは主節との対立が弱い。

【参考文献】

川上恭子(1993)「談話における「まあ」の用法と機能(1): 応答型用法の分類」, 『園田国文』14, pp.69-78.

川上恭子(1994)「談話における「まあ」の用法と機能(2): 展開型用法の分類」, 『園田国文』15, pp. 69-79.

川田拓也(2007)「日本語談話における「まあ」の役割と機能について」, 『言語学と日本語教育』V, pp.175-192.

川田拓也(2010)「日本語フィラーの音声形式とその特徴について—聞き手とのインタラクションの程度を指標として—」京都大学大学院, 博士論文.

申田秀也, 平本毅, 林誠(2017)『会話分析入門』, 勁草書房.

小出慶一(1983)「言いよどみ」, 『講座日本語の表現』3) 話しことばの表現』筑摩書房.

小出慶一(2007)「フィラー化の様相—「まあ」の場合」, 『埼玉大学紀要』教養学部, 43(1), pp.57-72.

定延利之, 田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構: 心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」」, 『言語研究』108, pp.74-92.

定延利之(2016)『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房.

大工原勇人(2010)「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究: フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて」, 神戸大学博士学位論文

富樫純一(2002)「談話標識「まあ」について」, 『筑波日本語研究』7, pp.15-31.

永田良太(2007)『接続助詞ケドの発話解釈過程と談話展開機能』, 溪水社.

野村美穂子(1996)「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語—「フィラー」に注目して—」, 『文教大学教育研究所紀要』5, pp.91-99.

丸山岳彦, 高梨克也, 内元清貴(2004)「『日本語話し言葉コーパス』に現れた挿入構造の分析」, 言語処理学会第10回年次大会発表論文集, pp.448-451.

丸山岳彦(2014)「『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分析」, 『日本語文法』14(1), pp.88-104.

森山卓郎(1989)「応答と談話管理システム」, 『阪大日本語研究』1, pp.63-88.

柳澤浩哉(2000)「近松における修辭的分析の試み—説得力を作り出す技法の解明」, 『表現研究』72, pp.31-38.

柳澤浩哉, 馮文彦(2019)「大学講義における「まあ」」, 『広島大学日本語教育研究』29, pp.9-16.

山田葵(2013)「自然談話における「マア」の使用について: 談話上の機能と話し手の情報処理のプロセス」, 『南山言語科学』8, pp.295-312.

山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』, くろしお出版.